

西晉の出處論

——皇甫謐に續く夏侯湛と束皙の「設論」——

佐竹保子

一 出處論としての「設論」

知識人が即官僚であることを求められていた古代中國において、「出」すなわち出仕と、「處」すなわち隱逸との關係をどうとらえるべきかは、知識人たちにとって閑却できない重大な問題だった。この出處についての認識が、漢代から南朝までのあいだに大きく様変わりしていくことは、一九四〇年代にすでに王瑤氏によって指摘されている。すなわち、先秦から漢代にかけてのさまざまな隱逸論や漢代に東方朔によつて語られた「身を保つ」ための「朝隱」論が、魏晉の玄學を経て、「精神を超越させる」「朝隱」論へと收束していく、と。だが、その魏晉から南朝にいたる過渡の様相が、必ずしも具體的に明らかになつてゐるとは言いがたい。

ここに出處についての過渡の様相をうかがわせる格好の文學ジャンルがある。前漢から六朝のある時期まで盛行した「設論」という有韻の文章のジャンルである。「設論」では、正反對の見解を持つ主人と客人が設定される。主人と客人の間で交わされるのは、多くが出處をテーマとする議論である。

「設論」は、隋唐以後はジャンルとして立てられることさえ少ない。

中唐の韓愈や柳宗元に至つてこのジャンルの文章がいくつか制作されているが、それ以前や以後にめぼしい作品が見當らず、盛行していたとは言いがたい。現代の我々にはすでに耳遠い名稱となつてゐる。だが六朝以前は、必ずしもそうではなかった。

『隋書』經籍志の總集の部は、當時「劉楨」という人物の撰した「設論集」二卷があつたことを傳える。この「劉楨」を、おそらく六朝の「宋齊間」の人と推量するのは、清の姚振崇の『隋書經籍志攷證』である。隋志はほかに、「東晉人」の撰した「設論集三卷」や、撰人不明の「客難集二十卷」が、梁代まで残存していたという。「客難」は、『文選』がその「設論」の部立ての劈頭に置く東方朔の文章の題名であるから、「客難集二十卷」も「設論」に類する文章を集めたものと考えられる。齊末の『文心雕龍』は、雜文篇の中で「設論」に屬するテクストをいくつか挙げ、寸評を試みている。梁代の『文選』は「設論」の部立てのもとに、東方朔の「答客難」、揚雄の「解嘲」、班固の「答賓戲」という兩漢の古典的な三篇を収める。いずれも、六朝期までに「設論」がジャンルとして認められ、かなりの篇數が制作されてきたことをうかがわせる資料である。

魏晉から南朝にかけては、「出處」のうちの「處」、すなわち「隱

「逸」が時人の關心を呼び、大きく取り上げられた時期だった。三世紀の中頃、魏の嵇康が「聖賢高士傳贊」を著わし、それからまもなく西晋の皇甫謐が『高士傳』と『逸士傳』を撰した。以後陸續と隱士の傳記が編まれるようになり、五世紀前半の宋の范曄の『後漢書』に至って、隱士の傳記が正史の中に堂々と位置を占めるようになった。五世紀初めの有力者の桓玄が、皇甫謐の子孫の皇甫希之を隱士にでっちあげたのも、自らの統治に箔をつけるためだった。「處」がクローズアップされるにつれて、「出」と「處」の間の緊張も高まっていく。絃上の王瑤氏の指摘にもあるように、「出」と「處」をめぐる見解はさまざまな論議を経て變容した。「設論」も、出處をおもなテーマとする文章であり、當時「設論」が人々の興味を惹き得たのは以上のような背景とかわつていよう。

出處論の變容と歩調を合わせるように、當時の「設論」の枠組みにも大きな變化が見られる。「設論」に登場する主人は、おおむねうだつの上から下級官吏か、さもなければ隱者である。漢代から西晋までの「設論」では客人がこの主人をからかい、あるいはかれに立身出世をたきつける。主人はこれに反駁して今の世に立身出世をはかることの危険と不當を訴える。「出」と「處」で分けるならば、主人は「處」の側に、客人は「出」の側に、より多く價值を見いだす者として設定されている。

東晋初めの郭璞の「客傲」は、この「出」と「處」の觀念をさらに徹底させる。「客傲」の主人は、出世のみならず隱逸をも否定する。隱逸も名聲を呼ぶので、身の危険を免れず、その意味では「出」と變わりがないからだ。この主人が選ぶのは「物を物とせず、我を我とせず、是を是とせず、非を非としない」と、「物」と「我」とを融合さ

せ何物をも突出させない『莊子』の萬物齊同の生き方である。「有名」を退け、本質的な「無名」である彼我の無差異を生きることで、かれは「處」を徹底させようとする。

ところが東晋中期の曹毗の「對儒」では、従前とは逆に、客人が出仕の危険と隱逸の素晴らしさを力説し、主人がこれに反駁する。西晋までの「設論」とは反對に、あたかも主人が「出」の側に、客人が「處」の側に身を置いているように見える。だがこの主人は、立身出世をよしとしているのではない。かれは「出」か「處」かのどちらかに固執する發想を自ら退ける。「大人は遠觀し、化に任せて昏曉す。出でも極勞せず、處りても巢(父)や(四)皓とならず。儒に在るも亦儒たり、道に在るも亦道たり」。主人が主張しているのは、朝廷にあつて役務に囚われることのない「朝隱」の生き方である。

つまり、西晋までの「設論」の主人は、多く明哲保身を論據に「處」に傾く生き方を主張し、東晋初めの「設論」の主人は、『莊子』の思想を媒介としてより徹底した「處」の生き方を探り、東晋中期の「設論」の主人は、「出」「處」の對立を放下することで双方に囚われない「出」を主張する。しかも、現存のもので見る限り、この東晋中期の「精神を超越させる」「朝隱」を説く「設論」で、六朝期までの出處をテーマとする「設論」は收束している。以後、出處に關する「設論」はあらわれない。

「設論」ジャンルの絃上の様相は、冒頭に擧げた王瑤氏の説く、「身を保つ」ための「朝隱」論が、魏晋の文學を経て、「精神を超越させる」「朝隱」論に收束する過程と、奇妙に重なり合うところがある。「設論」の作品群が、出處論の過渡の様相を具體的にうかがう手掛かりとなると豫想されるゆえんである。

二 出處論における西晉の位置

「設論」における出處論の變容は、敍上のように、東晉の郭璞と曹毗において顯著である。郭璞の「設論」の主人は、「出」と「處」の表面的な對立を無化して本質的な「處」をさぐる。曹毗の「設論」の主人は、その「處」をすら放下して「出」を選び、しかも「出」にもとらわれない。双方の態度と結論は異なっているが、どちらにも「出」と「處」の對立を無化しようとする志向が認められる。だがこの志向は、東晉に至ってようやくあらわれるのではない。西晉初めの「設論」である皇甫謐の「釋勸論」に、すでに萌芽が見いだされる。

「釋勸論」の主人は、「出」と「處」を同等の價值とみなす、いわゆる出處同歸論を唱えている。「易」や「論語」や「莊子」の昔から、治世は仕え亂世は隠れるというのが、「出」と「處」の圖式だった。だが「釋勸論」は言う。「大同」「至通」の自然の世界では、「寒」と「暑」、「陰」と「陽」という正反對の存在が、同等の價值を持ちつつ調和を保っている。亂世ではこの至福の狀態が失われるから「出」る者は「禮を棄て」、「處」る者はその存在さえ許されなくなる。だが、すぐれた皇帝（聖帝）の治世では、自然のままの世界が再現されるから、ちょうど「陰」と「陽」同様に、「出」と「處」も調和を保って存在でき、ともに價值を得る。『易』以來の「出」vs「處」という圖式を、自然を體現した「聖帝」の治世においては、という條件のもとで、出處を陰陽になぞらえ、「出」||「處」ととらえなおす。從來對立や優劣の線上でとらえられてきた二項を、「自然」を媒介に齊同ととらえなおす論理であり、これは、ほぼ同時期の郭象の『莊子注』にも見いだされる。「釋勸論」の出處同歸の論は、當時喧傳され

つづあった齊同の論理を、出處論の分野に導入したものだと思われる。

「釋勸論」の「出」||「處」というとらえなおしが、東晉の「出」と「處」の對立を無化する出處論に流れ込んでいる。とりわけそれは、「出」と「處」を二つながらに超越する曹毗の朝隱論まで、あと一歩である。「出」と「處」が同じ價值なら、どちらか一方に固執するいわれがなくなってしまうからだ。皇甫謐の「釋勸論」は、出處論としての「設論」が、「身を保つ」ための「朝隱」論から「精神を超越させる」「朝隱」論へと變容するターニング・ポイントの一つとなったと考えられる。

そこで氣になるのが、皇甫謐以後、東晉に至る以前の、西晉中後期の「設論」群である。それらは皇甫謐の出處同歸を唱える「釋勸論」をどのように繼承しているのか。東晉の朝隱論への懸け橋となり得ているのかどうか。

小論の目的は、出處論として「設論」をとらえた場合、その轉換點と考えられる「釋勸論」が出たあとの西晉のテクストを追跡することにある。その分析を通して、ともすれば潘岳、陸機の修辭主義に收斂されがちな西晉文學の個性と多様性を、わずかでも浮き彫りにできればと願うものである。

三 西晉の皇甫謐と、夏侯湛、束皙との關係

西晉中後期の「設論」は、夏侯湛の「抵疑」と束皙の「玄居釋」が現存している。夏侯湛は、正始四（二四三）年に生まれ永平元（二一九一）年に死んでおり、皇甫謐（二一五〜二八二）よりもほぼ一代若

い。西晉の開闢前後に生まれた東哲（二六四？～三〇三？）は、それよりさらに二十歳餘り若い。皇甫謐と東哲の間には半世紀ほどの開きがある。だが、夏侯湛と東哲にとつて、皇甫謐は無縁な人物ではありえなかつた。

第一に、當時としては長壽をまっとうした皇甫謐は、夏侯湛が四十歳の壯年期まで、東哲の場合でもかれが二十歳頃の青年期まで存命している。しかも皇甫謐は、景元（二六〇～二六四）年間から咸寧（二七五～二八〇）の頃まで、宰相から皇帝となつた司馬氏に一貫して招聘されつづけ、かつそれを一貫して固辭しつづけた名士である。かれの名が、同じ貴族社會にあつた夏侯湛や、若くして國學に學んでいた東哲の耳に入らなかつたとは考えがたい。

第二に、皇甫謐の弟子の摯虞の存在がある。摯虞はのちに秘書監や太常卿となり、西晉末の混亂のなかで惠帝や懷帝の側近くに仕えた人物である。『文章流別志論』の著者としても名高い。夏侯湛は、この摯虞と同世代である。一人はともに、晉の武帝の泰始（二六五～二七四）年間に賢良に擧げられ、對策の結果、摯虞は中郎に、夏侯湛はそれより一段下の郎中に任ぜられている。摯虞はさらに、武帝じきじきの策問に答えて太子舍人に拔擢され聞喜令に移つたが、夏侯湛は郎中に据え置かれたままだつた。

そもその家の柄をくらべれば、夏侯湛のほうが摯虞よりもはるかに上である。夏侯氏は、前王朝の曹氏と密接なつながりを持っていた。

夏侯湛の曾祖父の淵は武帝曹操の義妹を娶つており、大伯父の衡の妻は文帝曹丕の從姉妹である。現王朝の司馬氏とも母方の羊氏を介してつながつており、夏侯湛の母の妹は景帝司馬師の皇后にあたる。『晉書』の本傳に「族は盛門爲り」と記されるように、夏侯湛は盛族出身

の貴公子だつた。しかしそのかれも、摯虞との關係では、同期の若手官僚の劣等生と優等生ということになる。

いっぽうさらに世代が下の東哲については、『晉書』の本傳に、次のような話がある。武帝が摯虞に三月三日の曲水の由來を問うた。摯虞の答えが武帝を納得させなかつたので、東哲が進み出てさらに古い由來を物語つた。武帝は喜んで、東哲に金五十斤を賜つたという。

この話柄だけを見れば、東哲のほうが摯虞より優位にある。だが、實際に西晉王朝の有職故實の權威としてふるまっていたのは、摯虞の方である。『晉書』の全體、とりわけその禮志を閱すれば、摯虞の登場回数の方が壓倒的に多い。しかもその獻言のほとんどが容れられている。さきの話柄でも武帝が最初に尋ねたのは摯虞であり、その權威の摯虞をうち負かしたまればな事態だつたからこそ、東哲の手柄として本傳に特筆大書されたのである。

要するに摯虞は、貴公子夏侯湛の若き日の官界のライバルであり、同時に古典學者東哲の學問上のライバルだつた。しかもどちらの場合も摯虞の方がはるかに分がいい。夏侯湛と東哲が摯虞を意識しないことはありえなかつただろう。その摯虞の師匠が皇甫謐なのである。夏侯湛が「抵疑」を、東哲が「支居釋」を書いたとき、ライバル摯虞の師匠であり西晉前半期の名士である皇甫謐が書いた同じ様式の「釋勸論」を、念頭から拂うことは難しかつたと考えらる。

四 夏侯湛の「抵疑」

だが、というべきか、だから、というべきか、その夏侯湛の「抵疑」は、ライバルの師匠である皇甫謐の「釋勸論」に似ていない。「釋勸論」も「抵疑」も、設定は「出」に價値を置く客人とそれを退

ける主人、という従來の「設論」の枠のなかにある。だが、その書き方が異なっている。

先行する皇甫謐の「釋勸論」は、第二章に述べたように、「出」と「處」が同じ價值を持つという出處同歸の論を、讀み手に説得する意圖を持つ。だからその論を説く「主人」は、對する客人より壓倒的に優位にある存在として描かれる。客人が「存すれば則ち鼎食し、亡じて貴臣と爲るは、亦た茂んならずや」と出世をたきつけるのに對し、「主人」は笑つて相手の無知をたしなめる。

主人笑而應之曰、

吁、若賓可謂

習外觀之暉暉、

未覩幽人之髣髴也。

うものですよ

奥深い人のおぼろな姿が見えないとい

「主人」はさらに諄々と、自然Ⅱ「聖帝」、「陰陽Ⅱ」出處」というアナロジーを展開し、「聖帝」の治世のもとでは出仕も隱逸も同等の價值を持つと結論づける。

一浮一沈、

兼得其眞。

浮かぶ(出仕)のも沈む(隱逸)のもともに眞實を手に入れます

それゆえ「主人」は、隱者である自分を過度に卑下することもないし、また「聖帝」の治世のもとで「という前提に立っているから、今の時代を性急に批判することもない。「釋勸論」の筆調は終始ゆつたりと調和に満ちている。

だが元來の「設論」はこうではなかった。「設論」ジャンルの嚆矢である東方朔の作とされる「答客難」では、客人に「官は侍郎を過ぎず、位は執戟を過ぎず。意うに尙お遺行有るや」とからかわれた主人

が、深いため息とともに答える。

東方先生喟然長息、

仰而應之曰、

是固非子之所能備也。

客を見上げて答えた

これは由來あなたにすっかり分かることではありません

「東方先生」は説く。混亂に乗じて出世のしやすかった戦國時代と異なり、今の時代は、従順であれば樂に暮らせるが、へたに動けば苦しみを嘗める。秩序が固定し、階層は整然と分化して

尊之則爲將、

卑之則爲虜。

抗之則在青雲之上、

抑之則在深泉之下。

用則爲虎、

不用則爲鼠。

尊ばれば將軍で

卑しめられれば奴隸です

もちあげられれば雲の上

抑えられれば黄泉の下

用いられれば虎ですが

用いられねば鼠も同じ

出世せず用いられない自分は「虜」や「鼠」のたぐいだと告白している。今の時代への皮肉と自己卑下の言辭の強烈さが、「答客難」を特徴づけている。

皮肉と自己卑下という點で、夏侯湛の「抵疑」の筆調は、「答客難」に戻っている。しかも元祖の「答客難」よりもなお複雑で強烈だ。「釋勸論」が笑つて客人をたしなめ、「答客難」が嘆息して客人を非難したのと同じ箇所で、「抵疑」は「缺點を指摘してくれてありがとう」とばかりに客人をもちあげる。その上、客人は私を過大評價している」と恥じいつてみせる。

夏侯子曰、

噫、湛也幸。

夏侯子が言った

ああ、私は幸せです

有過、人必知之矣。

吾子所以褒飾之太矣、

斟酌之諭、

非小醜之所堪也。

だが「夏侯子」はけして謙虚なのではない。かれは自らを次のように語るからだ。

僕、東野之鄙人、

頑直之陋生也。

不識當世之便、

不達朝廷之情、

不能倚靡容悅、

出入崎傾、

逐巧點妍、

嘔囁辯佞。

できません

べらべらとおべんちゃらを言うことも

器用に飾りたてることも

いちいちべこべこすることも

朝廷の事情も分かりません

ここにことへつらうことも

かたくななもの知らず

私は東野の田舎者

かたくななもの知らず

當世の方便もわきまえず

朝庭の事情も分かりません

ここにことへつらうことも

いちいちべこべこすることも

器用に飾りたてることも

消磨灰燼、

垢辱招穢、

適可充衛士之鑿、

盈掃除之器。

並み居る秀才に較べれば、

譬猶投盈寸之膠、

而欲使江海易色、

燒一羽之毛、

而欲令大鑪增勢。

若燎原之煙、

彌天之雲、

噓之不益其熱、

噓之不減其氣。

「僕の言」は「糞土」であり、秀才たちにくらべれば「江海」に對する「盈寸の膠」、「大鑪」に對する「一羽の毛」、「燎原の煙」や「彌天の雲」に對する「噓」「噓」にすぎないという。自己卑下が大仰に過ぎ、他者との對比の落差が大きすぎる。この過度の大仰さが、敘述の眞實味を吹き飛ばしている。見る目のある読み手なら滑稽と皮肉を同時に感じて苦笑せざるを得ない。

「夏侯子」はさらに、朝廷の高官たちが人材の發掘に不熱心である

(彼在位者、……豈肯蹴躡鄙事、取才進人) わけを次のように語る。

子獨不聞夫神人乎。

あなたはこの神人のことを聞いたこと

すりへって腐り

汚れてきたならしくなり

番兵のかまどや

ごみ入れをみたすのが相應のところ

たとえれば一寸ほどのにかわを投げ入れて

海や川の色を變えようとし

ひとひらの羽を燒いて

大かまどの火勢を強めようとするようなもの

野を燒き盡くす煙や

空いっばいの雲が

人がそれを吹いてもより熱くはならず

吸っても雲氣が減つたりしないのと同じです

がないのですか

（神人は）風を吸い露を飲み

不食五穀、五穀を口にせず

登太清、天にのぼり

遊山嶽、山に遊び

靡芝草、靈芝をゆらし

弄白玉、白玉を手にします

不因而獨備、何ものにも因らずにすべてを持ち

無假而自足、何ものをも假らずに満ち足りています

……

故能入無窮之門、だから無窮への入り口に入り

享不死之年、不死の壽命を受けられるのです

以此言之、このようなおかたが

何待進賢、どうして賢才を推薦する必要がありません

……

高官たちは、『莊子』の藐姑射の神人に擬されている。読み手も「風を喰い露を飲み」以下を、高官たちを持ち上げるための比喩と心得て読み進んでいく。だが「故に能く無窮の門に入り、不死の年を享く」あたりまで至ると、さすがに立ち止まらざるを得ない。高官たちは生身の人間であり、「不死の年を享け」ているはずがない。いったん眞偽判断が介入すると、それはこれまでの敘述をも侵食する。敘述は途端にうさんくさくなり、比喩から「偽」へと轉落して、超俗を氣取るだけの高官たちの似非性が臭いたつ。誇大すぎる褒辭によって、高官たちは持ち上げられる素振り、突き落とされている。俗事にかかわらない高官たちの描寫が、「精神を超越させる」「朝隱」のスタイルに

似ていることにも、注目しておきたい。

末尾近くではふたたび、名劍に對するなまくら刀、駿馬に對する蹇の馱馬、名鏡に對する壁土、鴻鶴に對するウズラの比喩で、自らを大仰に卑下し、滑稽感を煽りたてる。

先行する皇甫謐の「釋勸論」は、「設論」の出處論の側面を利用して、みずからの出處同歸の説を眞面目に穩當に組み立てていった。だが夏侯湛の「抵疑」は、出處同歸の説を襲おうともしない。それどころか、この説と密接なつながりを持つ「精神を超越させる」「朝隱」風の生き方の高官たちを、痛烈な皮肉とともに描きました。「抵疑」の底深くに、出處を齊同とし超俗を氣取る人々への反發が感じられる。

「抵疑」は、皇甫謐の方向とは逆に、「設論」ジャンルに伏流していたもう一つの側面である滑稽性や風刺性を、前面におし出そうとする。それは自己卑下や他者への褒辭を、量的および質的に過剰に仕掛ける。そして「設論」を、卑下と自負とが緋い交ぜになった皮肉と毒のテクストにぐらりと引きもどす。その卑下ふりと皮肉は、元祖の「答客難」よりも甚だしく、むしろ中唐の韓愈や柳宗元の「設論」に近い。

たとえば柳宗元の「答問」で、その主人の「先生」は、自分をなじる客人を逆に持ちあげ、その評價を過大評價だとする。「抵疑」の主人と同じ身振りである。

先生答曰、先生が答えた

敬聞命。つつしんでうかがいまししょう

然客言僕知理道、ですがお客人が、私を道理を知り

識事機、時機を辯えていると言うのは

過矣。おかど違いです

「答問」が末尾近くで、駿馬に對する蹇の驢馬、宗廟の音楽に對する俗曲、美女に對する醜女、龍に對するユビヤヒルの比喩によつて、自らを落とすものも、「抵疑」の末尾近くの書き方に似る。

とはいへ同じ卑下でも、韓愈の「進學解」では、卑下の言辭の中から骨太の哄笑が聞こえてくる。「たとえ私のすぐれた文章や行いが世間に受け入れられなくとも（文雖奇而不濟於用、行雖修而不顯於衆）」と「進學解」の主人は言う。

猶且月費俸錢、

それでも月ごとに俸給を使い

歲靡粟粟。

歳ごとにお上の粟を減らし

子不知耕、

子は農耕を知らず

婦不知織。

妻ははたおりをせずともよい

乘馬徒徒、

馬に乗り徒卒を従え

安坐而食。

ゆったりと食うに困らない

踵常途之催促、

平凡なやりかたをせつせと追い

窺陳編以盜竊。

古い本をのぞいては剽竊する

然而聖主不加誅、

それでも天子に誅されず

宰臣不見斥、

宰相に排斥されない

茲非其幸歟。

何と幸いではありませんか！

「世間に受け入れられなくとも、月ごきの俸給は入ってくる」という卑近なジョークは、いかに羽目を外しても西晉の貴公子からは出てこない。その上「剽竊まがいの所業もお上に罰せられない。何と幸運ではないか」という。自らをことさら下世話にふてぶてしく描き、それを戲畫化して笑ってみせている。

これに對し柳宗元の「答問」には、ふてぶてしい開き直りの身振りがない。卑下しつつ相手を皮肉る刃は鋭いが、「答問」のそれは自分

自身をも傷つけずにいない。「答問」も一旦は「進學解」と同じように「罪にふれても五體満足のうちえ、他人の作ったものを食べて着ていており、農耕もはたおりも商賣もしなくてもよいのです」と語る。

觸罪受辱、幸得聯支體、完肌膚。

猶食人之食、衣人之衣、用人之貨、無耕織居販。

だが以上の結びは

然而活給羞愧恐慄之不暇。

しかし、生きながらに恥と恐れを

やむことなく蒙っています

「進學解」の「茲れ其の幸いに非ざらんや」という結びとは對照的だ。さらには

吾纒囚也。

私は囚人です

逃山林、入江海、無路。

山林に逃けても、江海に入っても、道

はありません

其何以容吾驅乎。

どのように身を安んずることができま

しょう！

と自分を追い詰める。

夏侯湛の大仰さに對する、韓愈の哄笑と、柳宗元の内攻の鋭さ。それぞれにニュアンスは異なるが、いずれも極端な自己卑下を武器に、読み手の笑いを呼び込みながら、當路者を皮肉つてみせる手法は共通している。自己卑下を武器とする滑稽文學としての側面は「答客難」以來「設論」ジャンルの中に伏流していたのだが、この三名のテクストは、それを隨所で誇大化し膨れ上がらせる。讀む方も、皮肉に苦笑しつつ表現の誇大さを樂しむことが眼目となる。

要するに夏侯湛の「設論」は、先行する皇甫謐の「設論」の出處同歸の説を敢えて無視し、元祖の「答客難」の滑稽性、風刺性を復活さ

せている。しかもそれをさらに徹底させることで、中唐の韓愈や柳宗元の「設論」に近付いていると考えられる。

五 束皙の「玄居釋」

夏侯湛とは異なつて、束皙の「玄居釋」は、皇甫謐の「釋勸論」の出處論を襲っている。だがそれを全うしきれていない。夏侯湛の「疑」は始めから意圖的に「釋勸論」を逸脱していたが、「玄居釋」は肝心な所で、たぶん意圖せずして「釋勸論」の眞意からずれている。「玄居釋」は、「釋勸論」ほど自然に關する敘述が周到ではなく、自然に「聖帝」、「陰陽」、「出處」というアナロジーも明示されない。だがともあれ、「出」と「處」が同じ價値を持つという主張ははっきりと記される。

在野者龍逸、

在朝者鳳集。

雖其軌迹不同、

而道無貴賤。

堯帝たちに仕えて世のために働いた后稷や殷契も、禪讓を退けた隱者の巢父や許由も、ともに不朽の名譽をになう賢者たちであり、その間に優劣はない、と斷言する。

稷契奮庸以宣道、

巢由洗耳以避禪。

同垂不朽之稱、
俱入賢者之流。

參名比譽、
誰劣誰優。

双方の名譽をくらべたとき
どちらが劣りどちらが優れているとい
えましよう！

皇甫謐の「釋勸論」が「一浮一沈、兼ねて其の眞を得」というのと同じ主張である。

ではなぜ、價値が等しいのに隱逸を選ぶのか。皇甫謐の「釋勸論」はその理由を自らの病氣という一點に收斂させ、古代の名醫たちと同じ時代に生まれ合わせなかつたことを残念がってみせた。隱逸を選ぶのは個人的な事情で、大義名分とは無關係だという身振りであり、かくてこそ隱逸と出仕は同價値だとの原理が貫かれる。

束皙の「玄居釋」も、隱逸を選ぶのはそれぞれの「性」や「志」によると末尾近くで述べる（且夫進無險懼、而惟寂之務者、率其性也。兩可俱是、而舍彼趣此者、從其志也。「性」はたしかに個人に屬する。だが「志」という言葉には、大義名分につらなる價値の匂いが濃厚だ。しかも續けて言う。

蓋無爲可以解天下之紛、

澹泊可以救國家之急。

澹泊は國家の危急を救うことができま

おもうに無爲は天下のいざこざをとき
ほぐし
す

「天下の紛」「國家の急」を救うのは隱逸の方だと明言する。そのうえ、掉尾の典故と對句の見せ場には、次のような事績が連ねられる。

翟璜不能迴西鄰之寇、

平勃不能正如意之立。

干木臥而秦師退、

翟璜は西隣の秦の侵攻を回避できず
陳平と周勃は如意を太子に立てようとする高祖の過ちを正せませんでした
(しかし) 段干木は寝たまま秦軍を

后稷や殷契は奮いたつて世に道德をし
きのへ
巢父や許由は耳を洗つて帝位の譲りを
避けました
どちらも不朽の名を後世に垂れ
ともに賢者の仲間に入っています

四皓起而感姬泣。

退かせ

四人の老人は起つただけで如意の母の

威姫を嘆かせました

さてこういふことなら

夫如是、

何舍何執、

何を捨て何を取り

春秋末の魏において秦の侵略を退けたのは、重臣の翟璜ではなく隠者の段干木であり、漢初に太子の廢立を阻止したのは、曲逆侯の陳平や絳侯の周勃ではなく四人の老隠者たちだったと説いている。「優」と「劣」が、この文脈では存在することになる。「出」と「處」が同價値だという前提が、ここに至って破綻している。

東哲の「女居釋」も、皇甫謐の「釋勸論」と同じように隱逸を正當化するために書かれている。だが正當化のために「釋勸論」が仕掛け

た、出仕と隱逸は同價値であるという前提を、「女居釋」は納得して

いない。「女居釋」は價値付け、等級付けにはいられない。當初から「女居釋」は、

「釋勸論」の自然に治世、陰陽に處と出處というアナロジーから身を引いていた。さらに掉尾では、二項が同價値だという

「釋勸論」の發想を受け入れられないでいる。「女居釋」は「釋勸論」の意圖を受け継ぎながら、その實「釋勸論」の發想からきわめて遠い

ところにいる。

六、皇甫謐、夏侯湛、東哲の出處論の位置

夏侯湛は、王羲之や顔真卿の書で有名な「東方朔畫贊」(『文選』李善注本卷四十七)を残している。その序で、かれは東方朔の生き方を次のように述べる。

以爲濁世不可以富貴也、

(東方朔は)亂世に富貴であつてはならないと考えた

故薄游以取位、

そこで薄給で位を得た

苟出不可以直道也、

(そのような)かりそめの出仕では正しい道を行なえないと考えた

故頑頑以傲世、

そこでほらを吹いて世を見下した

傲世不可以垂訓也、

世を見下しては教えを示せないと考えた

故正諫以明節、

そこできつちりと諫言して節義を明らかにした

明節不可以久安也、

節義を明らかにしては長く身を保てないと考えた

故詠諧以取容、

そこで諧謔でごきげんとりをした

この生き方が「贊」で「迹を朝隱に染め、和して同ぜず」と讀えらる。夏侯湛の認識する東方朔の「朝隱」とは、「薄游」と「傲世」と

「正諫」と「詠諧」との絶妙なバランスの上に成り立つものだった。

「朝隱」は、出處を同歸とする理論でも、出處を超越する心境でもない。困難な時世における複雑な生き方の實踐そのものと、夏侯湛は考えていたようだ。

ここで第四章に挙げた「抵疑」を見なおすならば、「抵疑」も「薄游」「傲世」と「正諫」と「詠諧」との危ういバランスの上に成り立っている。「抵疑」の主人も、出世に價値を置く世俗から身を引いた「薄游」「傲世」の姿勢を取る。だが世にまったく関わらないのではなく、當路者への皮肉や風刺は痛烈で、これが「正諫」にあたる。とはいえず「正諫」したままではわが身が危ういので、大仰な自己卑下で「詠諧」

する。「抵疑」は、皇甫謐の「設論」のように出處を觀念的に論ずるものではなく、東方朔風の「朝隱」という出處のスタイルを、文章の上に具現したものだ。それが滑稽文學としての成功に結びついている。

夏侯湛は、賦體の韻文を數多くものし、『晉書』に「善く新詞を構う」(本傳)と評される文章家である。『晉書』の文學者たちへの評語は「文辭を善くす」や「○藻あり」「○麗なり」などが歴代的に多く、「新」という語はほとんど用いられない。そうでなければ「新」と評する意味もないわけだが、管見ではほかに成公綏一人に止まる。馬積高の『賦史』も、夏侯湛が「駢體」と「騷體」を融合させた新しい形式を開拓しようとしたことを指摘している。内容においても、かれの韻文の自然描寫は、時間による移りゆきを細やかに追い、蟬聯體の多用もあいまって、ある流動性を感じさせる。齊梁の敝景詩に通じる清新さがあり、西晉の詩の自然描寫に多い、ぎっしりと詰め込まれた文様風の印象を免れている。

夏侯湛の、觀念的超俗的な出處論への反發と、文章家としての進取の氣性が、かれの「抵疑」を皇甫謐の出處同歸論から遠ざけ、「答客難」への回歸とその滑稽性の徹底化をもたらしたものと思われる。

では東哲の場合はどうか。第三章に挙げたように、東哲は若き日に國學に學び、有職故實に詳しい古典學者だった。本傳によれば、當時發掘された汲冢書の整理と校訂にも従事している。禮學にも精通しており、『隋書』の禮儀志や『通典』には、かれの議論がいくつつか収録されている。なかには、鄭玄や王肅一流の經學者の論を、その出典の『禮記』や『周禮』や『詩經』や『春秋』にまで遡って反駁したものもある。『通典』の撰者の杜佑は、その反論を「東氏の説は、禮に

暢ぶ」と讀んでいる。⁴³⁾

東哲は明らかに儒學を熱心に學んできた人物である。杜佑も評するように、その素養は並大抵のものではなかった。こうした人物に、内外を分別して秩序付ける儒學の發想が深く根を下ろしていたとしても不思議ではない。東哲の「玄居釋」が最後の最後で皇甫謐の齊同の論理を受け入れられなかったのは、かれの儒學の素養に由來する可能性が大きいだろう。

西晉の初めに皇甫謐が「設論」ジャンルを利用して展開した出處同歸の論は、そのまま直線的に東晉の「設論」の「精神を超越させる」「朝隱」論に結びつくのではない。西晉中期の夏侯湛と後期の東哲は、第三章に述べたように、皇甫謐の弟子の摯虞を介して、皇甫謐を意識せずにはいられない立場にあった。だが、夏侯湛における觀念的な出處論への反發と文章家としての矜持、および東哲における儒者としての硬骨が、それぞれの「設論」を、皇甫謐の提示した方向から逸脱させる。それぞれの個性が、皇甫謐の提起に意識的、無意識的に反發を加え、まったく違う表現を紡ぎだしている。

にもかかわらず、東晉には「設論」が新たな朝隱論を唱え、六朝の後半には沈約の『宋書』隱逸傳序が發表されて、王瑤氏の指摘のように大勢が「精神を超越させる」「朝隱」論へと收斂していく。六朝人たちのどのような個性のぶつかり合いが、それを具體的に可能にしていくのか、その点については稿を改めて考えてみたい。

注

(1) 王瑤「論希企隱逸之風」『中古文學史論之二——中古文人士生活——』七七頁～一〇九頁、未名書屋、一九四八年自序)を参照。末尾に「以前

東方朔的以仕爲隱、是因爲朝中也可以『形見神藏』『避世全身』、還坦白地承認希企隱逸僅只是爲了明哲保身。經過了魏晉玄學的洗禮、由抗志塵外、又加上了所謂『崇高懷道』『心神超越』的玄遠境界底希求。……這樣、文人名士們的出處問題、便又在『得意』的前提下、用『朝隱』來重新統一了(一〇九頁)と云う。石川忠久・松岡榮志譯『中國の文人』(大修館書店、一九九一年)にその譯が入っている。

(2) 前漢の「設論」については、谷口洋『客難』をめぐって(『中國文學報』第四十三冊一頁〜五二頁、一九九一年)と同氏「揚雄『解嘲』をめぐって」(同第四十五冊三二頁〜七五頁、一九九二年)に詳しい。

この二篇は、唐以前の「設論」を初めて本格的に取り上げた論文である。同氏はさらに後漢の「設論」について「後漢における『設論』の變質と解體」(同第四十九冊二八頁〜五七頁、一九九四年)を發表している。六朝までの「設論」の展開については、拙稿『設論』ジャンルの展開と衰退(『中國の人生觀・世界觀』二四一頁〜二五七頁、東方書店、一九九四年)に觸れている。「設論」というジャンルの様式がいかなるものかは、拙稿「皇甫謐の『釋勸論』について」(『未名』第十二號一頁〜二五頁、一九九四年)の第一章(一頁〜四頁)に記してある。

(3) テーマが出處論ではないが、「設論」の形態を取る文章も若干見いだされる。揚雄の「解難」(『漢書』卷八十七下揚雄傳下)は、かれの著作である『太玄』の難解さを辯護したものであり、陳琳の「應讎」(『藝文類聚』卷二十五)は、主君が都から撤退したわけを、葛洪の「應嘲」(『抱朴子』外篇第四十二)は、「抱朴子」が世俗に交わらないのに現實的な警世の書を書くわけを、「噉蔽」(同第四十三)は王充の「論衡」が長編であるわけを、それぞれ辯明している。

(4) 韓愈の「設論」については、山崎純一「韓愈の設論」二篇——とくにその滑稽感について——(『中國古典研究』二〇頁〜四二頁、一九七一年)

西晉の出處論

年)、西上勝「韓愈『進學解』の紋法について」(『文化』一九頁〜三五頁、一九八六年)などがある。

(5) 『隋書經籍志攷證』卷四十集部三に次のようにある。「案、宋齊間有三劉楮。一、秘書郎劉楮、爲元凶劭所殺、見宋書長沙景王附傳。一、大司農劉楮、爲交州刺史、見齊書武帝永明三年本紀。一、南中郎司馬劉楮、爲司州刺史、見永明九年本紀。此不著時代、莫能詳焉」。前掲谷口論文の「後漢における『設論』の變質と解體」の注四六にも指摘がある。

(6) 『文選』李善注本卷四十五では「答客難」と題されている。

(7) 茂木信之「文人と隱逸」(荒井健編『中華文人の生活』一九頁〜六四頁、平凡社、一九九四年)にも「隱逸とのかかわりがそれまでのように深く隱微にはなくおもてだつて本格化するの、またそれが時代の思想的課題のひとつともなるのはこの期つまり六朝時代であり、そしてほとんどこの期だけであった」(四八頁)とある。

(8) 『隋書』卷三十三經籍志二雜傳の部を参照。

(9) 『晉書』卷九十九桓玄傳を参照。

(10) 漢代から西晉までの、出處を論じた「設論」は次のものが現存している。東方朔「答客難」(『漢書』卷六十五東方朔傳、『文選』李注本卷四十五)、揚雄「解嘲」(『漢書』卷八十七下揚雄傳下、『文選』李注本卷四十五)、班固「答賓戲」(『漢書』卷一百上敘傳、『文選』李注本卷四十五)、崔駰「達旨」(『後漢書』列傳卷四十二崔駰傳)、張衡「應問」(同列傳卷四十九張衡傳)、崔寔「答讎」(『藝文類聚』卷二十五、蔡邕「釋論」(『後漢書』列傳卷五十二蔡邕傳)、郗正「釋讎」(『三國志』卷四十二郗正傳)、皇甫謐「釋勸論」(『晉書』卷五十一皇甫謐傳)、夏侯湛「抵疑」(同卷五十五夏侯湛傳)、束皙「玄居釋」(同卷五十一束皙傳)。

(11) 「客傲」(『晉書』卷七十二郭璞傳)については、前掲拙稿『設論』ジャンルの展開と衰退(二四七頁〜二四八頁)に説明がある。

(12) 「客傲」に「形廢則神王、跡祖而名生。體全者爲犧、至濁者不孤。

做俗者不得以自得、默覺者不足以涉無」とある。

(13) 「客傲」に「不物物我我、不是是非非。忘意非我意、意得非我懷。寄群類乎無象、域萬殊于一歸。不壽殤子、不夭彭涓。不壯秋豪、不小太山」とある。

(14) 「對儒」(『晉書』卷九十二文苑傳曹毗傳) については前掲拙稿「設論」ジャンルの展開と衰退(二四八頁〜二五〇頁)に説明がある。

(15) 「對儒」の客人は「名爲實室、福萌禍胎。朝敷榮華、夕歸塵埃。未若澄虛心於支圃、蔭瑤林於蓬萊、絕世事而倚黃綺、鼓滄川而浪龍鯨者矣」と主張し、主人は「安期解褐於秀林、漁父擺釣於長川」と反駁する。

(16) 「對儒」に「大人達觀、任化昏曉。出不極勞、處不異階。在儒亦儒、在道亦道」とある。

(17) 「釋勸論」(『晉書』卷五十一皇甫謐傳)の論理の筋道については、前掲拙稿「皇甫謐の『釋勸論』について」の第二章以下を参照されたい。

(18) 『易』坤卦「文言曰、……天地閉、賢人隱」、『論語』泰伯篇「危邦不入、亂邦不居、天下有道則見、無道則隱」、同衛靈公篇「君子哉蘧伯玉、邦有道則仕、邦無道則可卷而懷之」、『莊子』人間世篇「天下有道、聖人成焉。天下無道、聖人生焉」、同繕性篇「不當時命而大窮乎天下、則深根寧極而待」などを参照。

(19) 「釋勸論」に次のようにある。「寒暑相推、四宿代中、陰陽不治、運化無窮、自然分定、兩克厥中。二物俱靈、是謂大同、彼此無怨、是謂至通」、「若乃衰周之末、貴詐賤誠、……頃奮拔山之力、刺陳鼎足之勢、東郭劫於田榮、顏闔恥於見逼。斯皆棄禮喪貞、苟榮朝夕之急者也」、「若乃聖帝之創化也、……一明一味、得道之概、一弛一張、合禮之方、一浮一沈、兼得其真」。

(20) 『莊子注』の冒頭に「夫小大雖殊而放於自得之場、則物任其性、事稱其能、各當其分、逍遙一也。豈容勝負於其間哉」とあり、「小」「大」を、「不容勝負」ととらえている。

(21) 以下の夏侯湛についての記述は『晉書』卷五十五夏侯湛傳による。

(22) 以下の皇甫謐についての記述は『晉書』卷五十一皇甫謐傳による。

(23) 以下の束皙についての記述は『晉書』卷五十一束皙傳による。

(24) 『晉書』皇甫謐傳に「門人攀虞・張軌・牛綽・席純、皆爲晉名臣」とあり、同卷五十一攀虞傳にも「虞少事皇甫謐、才學通博、著述不倦」とある。以下の攀虞についての記述は『晉書』攀虞傳による。

(25) 『文章流別志論』については、與贈宏「攀虞『文章流別志論』攷」(『中國の文學理論』六一頁〜七六頁、筑摩書房、一九八八年。初掲は『入矢・小川教授退休記念中國文學語學論集』、一九七四年)を参照されたい。

(26) 『晉書』攀虞傳に「舉賢良、與夏侯湛等十七人策、爲下第、拜中郎」とあり、夏侯湛傳にも「泰始中舉賢良、對策中第、拜郎中、累年不調」とある。これについて宮崎市定『九品官人法の研究』(同朋舎、一九七七年第三版)は「夏侯湛の方が成績が悪かった筈である。中第には中等及第の意味もあるが、この場合は第にあたとと讀むべきである。中郎と郎中は魏晉共に八品官であるが、その秩は漢以來、大いに懸隔があり、三國職官表によれば魏代でも中郎は比六百石、郎中は比三百石である。晉代の秩數は不明であるが、中郎が郎中の上位に位することは疑いない」(二九九頁〜一四〇頁)と記す。

(27) 『三國志』卷九夏侯淵傳及び『晉書』夏侯湛傳参照。

(28) 『三國志』卷九夏侯淵傳注引『世語』及び『晉書』卷三十一后妃傳上景獻羊皇后傳参照。

(29) 『晉書』の攀虞傳に、禮制に關する獻言が數例記され、そのほとんどが納れられている。さらに同卷十九から卷二十一までの禮志にも、攀虞の獻言が管見のかぎり十七例記されている。そのうちの十六例に「詔從之」「詔可其議」「制可」というコメントがあり、攀虞が西晉王朝の故實關係の權威だったことをうかがわせる。

(30) なみいる秀才たちにわが身を對比する表現は、先行の揚雄「解嘲」、崔駰「達旨」、蔡邕「釋詁」にも次のようにある。「天下之士、雷動雲合、……譬若江湖之雀、勃解之鳥、乘雁集不爲之多、雙魚飛不爲之少」

「解嘲」。「衣裳被宇、冠蓋雲浮。譬猶衡陽之林、岱陰之麓、伏尋抱不爲之稀、莖拱把不爲之數」(「達旨」)。「濟濟多士、端委綰綬、……譬猶鍾山之玉、泗濱之石、累注壘不爲之盈、採浮磬不爲之索」(「釋詁」)。だが「解嘲」では秀才たちが「江湖之雀、勃解之鳥」で、自らは「二羽の雁」や「鬼」に比喩されており、雙方にレベルの違いはない(「江湖之崖、勃解之鳥」と作る本の場合も、そこに集まる鳥たちをあらわし意味はほぼ変わらない)。「達旨」の秀才たちは「衡陽之林、岱陰之麓」、自らは一抱えの木であり、「釋詁」の秀才たちは「鍾山之玉、泗濱之石」、自らは玉や石である。雙方の差異は量的なもので、「抵疑」ほどの落差がない。

(31) 「抵疑」の末尾近くに次のようにある。「夫干將之劍、陸斷狗馬、水截蛟龍、而鉛刀不能入泥。騏驎驪之乘、一日而致千里、而鷲蹇不能邁敵。百鍊之鐵、別鬚眉之數、而壁土不見泰山。鴻鵠一舉、橫四海之區、出青雲之外、而尺鷃不陵桑榆。此利鈍之覺、優劣之決也」。

(32) 『柳宗元集』卷十五(中華書局、一九七九年)による。

(33) 「答問」の末尾近くに次のようにある。「且夫白蠶、驟耳之得康莊也、逐奔星、先飄風、而跋鹽不出泥淖。黃蠟、元閉之登清廟也、鑿天地、動神祇、而鳴鳴咬哇不入里耳。西子・毛嬙之踏後宮也、徹朝日、煥浮雲、而無鹽逐於鄉里。蛟龍之騰於天淵也、爾六合、澤萬物、而蝦與蛭不離尺水」。

(34) 馬其昶校注・馬茂元整理『韓昌黎文集校注』卷一(上海古籍出版社、一九八六年)による。

(35) 前掲拙稿「皇甫謐の『釋勸論』について」第四章十八頁を参照。

(36) 『呂氏春秋』期賢篇、『史記』卷四十四魏世家など参照。

(37) 『史記』卷五十五留侯世家、同卷五十六陳丞相世家、同卷五十七韓侯周勃世家を参照。

(38) 「東方朔畫贊」については、與論宏「東方朔三つの顔——『東方朔畫贊』によせて——」『書論』第九號一三三頁〜一四七頁、一九七六年)に詳しい。この論文は「東方朔畫贊」の制作時期について、『晉書』夏侯湛傳が「抵疑」の制作時期とする「夏侯湛が二十代後半の頃の大きな失意の数年間に、その制作の年時をあてはめて、おそらく大過あるまいと私は思う」(二四五頁)と推測している。

(39) 馬積高「賦史」(上海古籍出版社、一九八七年)一七二〜三頁。與論宏「詩品」(朝日新聞社『文學論集』所収、一九七二年)も夏侯湛を「文章家としても盛名高く、新趣向の表現を得意とした」(二二二頁)と説明している。

(40) 夏侯湛の「長夜謠」は「日暮兮初晴、天灼灼兮暹清。披雲兮歸山、垂景兮照庭。列宿兮皎皎、星稀兮月明。亭檐隅以遑遙兮、盼大虛以仰觀。望閭闔之昭晰兮、麗紫微之暉煥」(『藝文類聚』卷十九)と、晚晴の時をとらえ、晴れた空の夕方から夜にかけての移り行きを清らかに描きだしている。また「春可樂」は「春可樂兮、樂崇陸之可娛。登夷岡以迴眺、超矯駕乎山嶠。綴雜華以爲蓋、集繁蕤以飾裳。散風衣之飄氣、納散懷之潛芳。鸚外交以弄音、翠翹翹以輕翔」(『藝文類聚』卷三)と、風の流れと花の香りを同時に感じさせ、それに鳥の聲と動きを添えて春をあらわしている。潘岳の「金谷集作詩」の「朝發晉京陽、夕次金谷澗。迴谿繁曲阻、峻阪路威夷。綠池汎淡淡、青柳何依依。瀦泉龍鱗澗、激波連珠揮」(『文選』李注本卷二十)という描寫が視覚に偏してやや重苦しいのにくらべ、より自在で軽やかな描き方になっている。

(41) 戸倉英美「風景の誕生とその崩壊」(『中國——社會と文化——』第八號八一頁〜一〇一頁、一九九三年)第一章を参照。その八五頁に「陸機・潘岳をへて謝靈運まで、自然が絢爛豪華な文様と化するという傾向は

「いっそう強められていた」とある。

(42) 『隋書』卷七禮儀志第二、『通典』卷五十五、同卷五十九、同卷七十

一、同卷八十八、同卷一百四などを参照。

(43) 『通典』卷五十九参照。

(44) 前掲茂木論文は、六朝期の「朝隱」論について「その典型とも極北と表いつているのが、六朝期の代表的な隱逸論のひとつにかぞえられる沈約(四四一〜五一三)の『宋書』隱逸傳の序にほかならない」(五六頁)と述べる。